

2016年度 第1回 公開講演会 (2016年5月28日 豊橋校舎)

河原田遺跡発掘50年

愛知大学総合郷土研究所研究員

棄原将人

司会 (廣瀬憲雄) 皆さんお集まりいただきましてありがとうございます。只今より愛知大学総合郷土研究所が主催します2016年度の第一回講演会をはじめたいと思います。開催に先立ちまして本研究所の所長であります神谷智より一言ご挨拶を申し上げます。

所長あいさつ (神谷智) こんにちは。愛知大学総合郷土研究所の所長をしております神谷です。本日は遠方からもたくさんの方にお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。こんなに大勢の方がおみえになるとは思わなかったものですから、会場の後ろのほうは机の用意が間に合わず、ご迷惑をおかけしています。申し訳ございません。

さて、今回の報告は1960年代、もう50年以上も前の、愛知大学に私も知らない先生方がいた時代の話です。愛知大学がこのころ考古学をやっております、盛んに遺跡の発掘調査をしておりました。けれどもその後、教員が変わったりする中で、それらの調査が最後まできちっと完結できていなかった、ということが今から6～7年前に判明しました。ここにいる棄原さんたちの進言で、私はまだその時は所長ではなかったのですが、大学の予算を取り付けまして、2011年度から2013年度までの3年間、考古資料の整理を行ないました。それでもまだ整理できていないものが残っておりましたので、再度、2015年度から来年度(2017年度)までの3年間の予算を得て、これで何とか整理を終えたいと思っております。

それで、まだ途中ではありますが、こうやって愛知大学が、総合郷土研究所が、考古遺物の整理をしてどんな成果が上がっているか、ということを中心報告的な形で、本日ご報告させていただきます。以前に、2013年と2015年に岩野見司先生(東海学園大学名誉教授)と井口喜晴先生(元奈良国立博物館上級研究員・元大正大学教授)にそれぞれご報告いただきましたが、今回は具体的な成果報告ということで、もう少し詳しいお話ができるかと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

講演 (棄原将人) ただいまご紹介に与りました棄原将人です。

私は、豊川市桜ヶ丘ミュージアムという美術博物館の学芸員をしておりますが、本業の傍ら、愛知大学の総合郷土研究所で、研究員として活動させていただいております。大学の研究員として何をしているかと申しますと、今日お話をさせていただく河原田遺跡の出土物の分析と整理をしています。その分析作業がだいぶ進んで参りましたので、今日は、「河原田遺跡発掘50年」と題して、これまでに分かったこととお話いたします。私の話は、お配りしました資料と、スライドを使って進めて参ります。まず皆様には正面のスクリーンをご覧くださいと思います。



1. はじめに

演題に「発掘50年」とありますように、河原田遺跡の発掘調査が行なわれたのは、今から51年前の1965年、昭和40年のことでした。当時の新聞を見ますと、「珍しい甕棺群を発掘」「弥生前期の貴重な資料」と見出しが躍ります。この見出しを見るだけでも、河原田遺跡が弥生時代の遺跡であること、珍しい土器棺、土器の棺がたくさん出土したのだな、ということが分かります。記事には、「愛知大学の学生45人が大がかりな発掘調査をしている」とも書かれています。調査にあたったのは愛知大学で、多くの学生が発掘に参加していました。

このように大々的に報道された発掘調査から3年2か月の後、河原田遺跡は所在地である御津町の指定史跡になりました。指定理由は次のようなものでした。「愛知大学の学生により部分発掘が行なわれ、多くの貴重な遺物を得ることができた」。愛知大学による発掘調査が、地域に活気をもたらし、文化財指定の機運を高めたのです。当時の盛り上がりぶりが窺えます。

そんな湧き立つ発掘調査から半世紀を経た今、私はその出土遺物を整理して、いろいろ調べています。この過程で、今まで知られていなかった河原田遺跡の様相が徐々に明らかになってきました。それは単に、河原田遺跡という一つの遺跡の具体像だけでなく、東三河の初期弥生文化はどのように成立したのか、ということを解明する糸口を与えてくれそうです。今日は、そんな話ができればいいな、と思います。

2. 河原田遺跡をめぐる環境

さて、本題に入って行きましょう。まず、河原田遺跡がどんな環境にあるのか、皆さんと認識を共有しておきたいと思います。河原田遺跡は、愛知県の東部、豊川市御津町上佐脇河原田に所在します。海からそう遠くない場所で、海岸からの距離は2.5kmを測るばかりです。弥生時代にはもっと海が近かったことでしょう。

河原田遺跡は、音羽川の支流である安藤川のすぐ傍らに位置しています。音羽川は、岡崎市方面の山中から、赤坂・御油・国府を流下して、三河湾に注ぐ川です。

支流の安藤川は、今では水路のような細流ですが、かつては音羽川の本流だった河道です。音羽川や安藤川（音羽川の旧流路）に面した微高地上には、弥生遺跡が点在していますから、音羽川流域の沖積地は、弥生時代においても安定した微高地が展開していたと推測されます。

1965年の発掘当時、河原田遺跡の調査地点は畑地でした。周囲はみな水田で、そこだけが取り残されたように畑となっていました。周囲より1メートルほど小高く、さながら水田に浮かぶ島畑のような景観でした。

発掘調査は、ここを全面的に掘り下げるのではなく、幅2メートルのトレンチを設けてその部分だけを調査するという部分発掘でした。当時は全面発掘よりもこのような部分発掘が一般によく行なわれていました。



Fig. 1 河原田遺跡の位置

3. ひしめきあう土器棺

河原田遺跡の発掘調査で確認された遺構は土器棺墓だけです。土器棺とは、土器（甕や壺）を利用した棺のことで、堅穴住居とか柱穴などの生活遺構は検出されていません。

河原田遺跡では、調査区の中から8基の土器棺墓が見つかっています。1号土器棺から8号土器棺まであります。このほかに、調査区の外からも、9号土器棺・10号土器棺と2つの土器棺が出土しています。ここからは土器棺の話をして参ります。

まずこの写真は3つの土器棺が出土した様子です（Fig. 2）。土器棺は、地面に穴（墓穴）を掘って、その穴の中に埋設されていた訳ですが、河原田遺跡の発掘調査では、墓穴は確認されていません。河原田遺跡では土色のコントラストが不明瞭で、穴の輪郭を把握することが困難だったため、本来、穴の中に収まっているはずの土器棺がまる見えになるまで掘り下げてしまっている、墓穴を掘り飛ばしてしまっている、という状態です。写真中、最も手前に写っているのが1号土器棺、1号土器棺の背後に隠れるように2号土器棺、そして、ちょっと離れて奥に見えるのが3号土器棺です。

土器棺の出土状態を見るのにはポイントがあります。それは、土器棺が埋められていた姿勢、墓穴の中に据えられていた姿勢です。例えば、1号土器棺と2号土器棺は斜めにして埋められていました。土器を真っ直ぐ墓穴の中に据えるのではなく、あえて斜めに傾けて据えてあったのです。

出土状態の写真では、土器棺が斜めなのかどうか分かり難いかも知れませんが、土器棺を復元して、写真どおりに置いてみると、斜めだったことが確かめられます。

復元なった1号土器棺と2号土器棺をお見せしましょう（Fig. 3・Fig. 4）。両方とも壺形土器の棺、壺棺です。欠損部分がありますので、完全な形ではありませんが、これが土器棺を真っ直ぐに置いた状態です。この土器棺を、先ほどの出土状態の写真に合わせて置き直してみると、この土器棺が斜めに埋められていた、ということが確認できるのです。

なお、この2つの土器棺は、2号土器棺の方が古くて、2号土器棺は弥生時代前期末～中期前葉に、1号土器棺は弥生時代中期前葉に、それぞれ位置付けられます。



Fig. 2 1・2・3号土器棺の出土状態



Fig. 3 1号土器棺

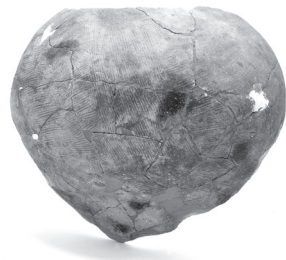


Fig. 4 2号土器棺

次の写真は、6号土器棺の出土状態です(Fig. 5)。これは分かりやすいですね。壺棺を横に寝かせて埋めていることが分かります。土圧で潰れていますが、壺はほぼ完全な状態で出土しています。

復元なった6号土器棺を見てみましょう(Fig. 6)。頸の部分ですぼまっています。すぼまって狭くなっている部分の内径は15cm程度ですから、この壺棺に納めた遺体が、小振りであったことが分かります。新生児や死産児の埋葬棺だったのでしょうか。それとも、再葬用の土器棺だったのでしょうか。

再葬とは、いったん遺体を白骨化させて、骨だけにしておいてから、その骨を壺に入れて再埋葬することです。そのための再葬用の土器棺だった可能性も考慮しておく必要があるでしょう。

新生児や死産児用の土器棺だったのか、成人再葬用の土器棺だったのか、骨が残っていませんでしたから、どちらの可能性もあります。この6号土器棺に限らず、河原田遺跡の土器棺墓には、骨が残っている事例は1つもありませんでした。

なお、この6号土器棺は、弥生時代中期中葉に位置付けられるものです。

次に、10号土器棺を見てみましょう(Fig. 7)。これは、発掘調査区外から出土したものです。不時発見で掘り出されたから、この壺棺の出土状態は分かりません。斜めに埋められていたのか、横に寝かせた状態だったのか、あるいは立った状態で埋められていたのか、記録がありません。それでも、土器棺がどのように壊れているか、という破損状態を観察することによって、土器棺の埋設形態を読み解くことができます。

この壺棺は、真っ二つに縦割りされたような状態で残っていました。この壊れ方は、壺棺の埋設が横位だったことを示しています。

これは、10号土器棺が埋められた様子を示したイラストです(Fig. 8)。この壺棺は、横に寝かせた状態で埋められました。その後2,000年くらい埋まっていた訳ですが、この間にこの地は畑となり、地表面近くの土は鍬や鋤、あるいは耕運機で掘り返され、耕されました。土が掘り返されると、埋まっている壺も、その部分が壊れてしまいます。ですから、出



Fig. 5 6号土器棺の出土状態(岩野見司氏撮影)



Fig. 6 6号土器棺



Fig. 7 10号土器棺

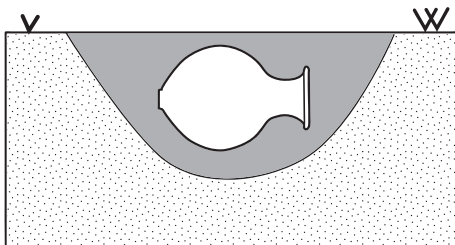


Fig. 8 10号土器棺の埋設イメージ

土した時の10号土器棺は、真っ二つに縦割りされたように半分だけが残っていた、という訳です (Fig. 9)。このように、土器棺がどのような壊れ方をしているか、ということも考古学的に重要な情報になります。

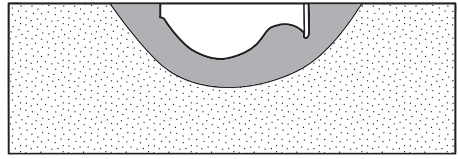


Fig. 9 10号土器棺の遺存状態イメージ

次は3号土器棺です。3号土器棺の埋設状態は非常に特徴的です。写真を見ると、甕を逆さまにして伏せているのが分かります (Fig.10)。ですから、発見当初は、逆立ち状態の甕棺かと思われたのですが、この甕を取り上げてみると、内部から壺が出てきました。内部の壺こそが棺本体 (棺身) だったのです。逆立ち状態で伏せられた甕は、中に入っている壺棺を覆い隠す蓋 (棺蓋) だったのです。ちなみに、内部の壺棺はまっすぐ立った状態、立位で据えられていました。



Fig.10 3号土器棺の出土状態

復元なった3号土器棺のセットをお見せしましょう (Fig.11・Fig.12)。壺が棺の本体 (棺身)、甕が壺 (棺身) に覆いかぶさる蓋 (棺蓋)、ということになります。この3号土器棺のセットは、弥生時代中期前葉に位置付けられます。



Fig.11 3号土器棺(棺身)



Fig.12 3号土器棺(棺蓋)

次は、5号土器棺の出土状態です (Fig.13)。5号土器棺も特徴的な埋設形態です。写真を見ると、土器棺は垂直に対して40°くらい傾いています。斜めに据えられたのか、立てて据えられたのか、どちらと判断すべきか迷う角度です。



Fig.13 5号土器棺の出土状態(岩野見司氏撮影)

5号土器棺の本体は壺です。壺の上に帽子のようにかぶせられているのが、逆さまにした甕で、これが棺蓋となります。

5号土器棺で、もう一つ指摘できることがあります。それは、壺の頸から上をわざと打ち欠いて加工していることです。蓋を帽子のようにかぶせた状態

で出土していますから、蓋をかぶせる前に、壺の頸から上を打ち欠いていることは間違いありません。壺の中に遺体（遺骨）を収納するために、狭い頸の部分の打ち欠く必要があったものと考えられます。打ち欠いてできた割れ口の内径は約17cmで、この壺棺に収納された遺体（遺骨）の大きさが窺えます。なお、この5号土器棺のセットは弥生時代中期中葉に位置付けることができます。

ここまで、土器棺について話をして参りましたので、一旦、小括してみましよう。

河原田遺跡出土の土器棺は、棺身に壺を使用するもの、壺棺ばかりです。これは、弥生時代前期後葉以降、甕棺よりも壺棺の方が多くなる、という他の遺跡での傾向からしても、頷けることです。

河原田遺跡における土器棺の埋設形態は、前期段階では横位や斜位ですが、中期になると、土器棺がだんだん立ってくる、という傾向が見られます。土器棺が立位志向になってくるのもまた、他の遺跡での状況と軌を一にするものです。

また、5号土器棺のような事例（頸から上をわざと打ち欠いて、壺棺の入り口を広くして、別個体の土器で蓋をする。そして、この組み合わせた土器棺のセットを、横位ではなく、立てるようによねる事例）を、他地域での事例（例えば中部高地における土器棺再葬事例など）と比較することによって、土器棺の使い方をさらに考えていかなければならないな、と思っています。



Fig.14 5号土器棺(棺蓋)



Fig.15 5号土器棺(棺身)

4. 東三河の弥生遺跡の消長と河原田遺跡

河原田遺跡が凄いのは、土器棺墓だけではなく、それよりも凄いことがあります。皆様のお手元にお配りしました「東三河の主な弥生遺跡の消長」という表をご覧ください (Fig.16)。これは、東三河の主な弥生遺跡の存続期間をグラフで示したものです。

河原田遺跡が凄い、というポイントは、弥生時代の前期後葉から弥生時代の終わりまでずっと継続して営まれた遺跡だということです。河原田遺跡の出土遺物を整理していますと、弥生時代の前期後葉から弥生時代の最後まで、途絶えることなく継続して各時期の土器が確認できますのです。

消長表 (Fig.16) に明らかなように、弥生時代前半の遺跡は、弥生時代半ばまでにほとんど消えてしまいます。弥生時代後半には続いていきません。麻生田遺跡のような一部例外の遺跡もありますが、それも中期中葉以降は色の薄いグラフで示す程度の状態です。弥生時代前半の遺跡は、基本的に弥生時代中期前葉までで途絶えてしまうのです。

一口に弥生時代と言っても、この地域においては、前半と後半とで断絶がある、ということが、消長表 (Fig.16) からお分かりいただけるとと思います。

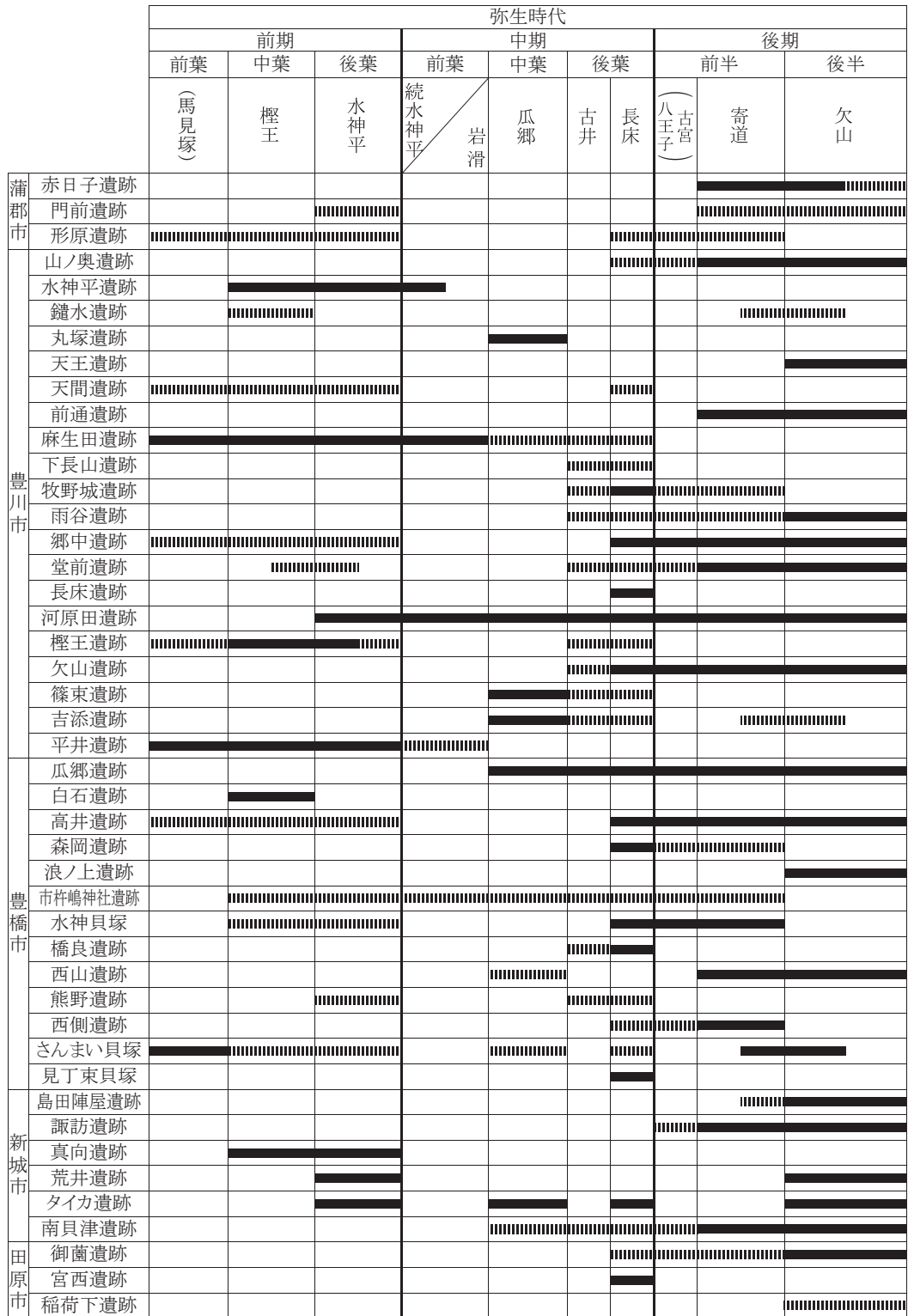


Fig.16 東三河の主な弥生遺跡の消長

実は当地域では、弥生時代に入っても、前半のうちは（中期前葉までは）、縄文時代とあまり変わらない暮らしをしています。石器も縄文時代とあまり変化がなく、積極的な稲作の痕跡も確認することができません。弥生時代＝稲作という教科書で習ったイメージがありますが、実状はそうではないのです。灌漑稲作を生活の基盤に据える弥生文化は、北部九州でまず成立し、弥生時代前期のうちには西日本一帯にまでに広がります。しかし、それは濃尾平野以西の話です。当地域には当てはまりません。

灌漑稲作とともに広がった弥生時代前期の土器を遠賀川系土器と呼びます。遠賀川系土器は、水稲耕作を基調として生まれた日常生活道具です。弥生時代前期に、灌漑稲作をやり始めた地域では、遠賀川系土器という農耕生活に適した機能の土器をメインに使うことが定着していきます。

弥生時代前期、西日本一帯から濃尾平野までは、灌漑稲作を行ない、遠賀川系土器（水稲耕作を基調として生まれた日常生活道具）を使う、まさに弥生文化の地域だったのですが、三河より東の地域では、積極的な稲作の痕跡を確認することができません。先ほど述べましたとおり、石器も縄文時代とあまり変わりません。

この時期、三河以東の中部・関東地方では、遠賀川系土器ではなく、条痕文系土器（貝殻やササラ状具で器面をひっかいた条痕文の土器）という縄文文化の伝統をより色濃く引き継ぐ土器をメインに使っています。

弥生時代前半のこの時期、尾張から西の地域では、遠賀川系土器をメインに使い、灌漑稲作を生活基盤とする弥生文化だったのに対して、三河から東の地域では、条痕文系土器をメインに使い、まだ積極的に稲作を行っていない縄文伝統の根強い文化だったのです（一部には白石遺跡のような例外的な集落もありましたが）。

また、弥生時代前半の集落は、概して規模が小さく、数も少ない、という特徴があります。これは三河に限ったことではありません。三河より東の地域では、縄文時代の晩期後半くらいから、気候の寒冷化に対応して、集落を小規模化・分散化させていきます。当時の人びとは、寒冷化する気候に順応して生きていくための戦略として集落の規模を小さくして、分散化をはかり（同一域内で食い合うよりも、分散して生活することで生計を維持しようとし）、山だったり、低地だったり、いろいろな場所に住んで、多角的な生業戦略を行なったようです（小規模な集落であるために、痕跡が不明瞭で、遺跡として把握される数が少ないのです）。

それが、弥生時代中期中葉になると、瓜郷遺跡・篠東遺跡・吉添遺跡のような比較的規模の大きな集落が、突如として出現し、東三河においても本格的な灌漑稲作が始まりました。この時期、何らかの集落の再編が行なわれたのだと思います。なぜなら、灌漑水田は、水路を掘り、ひろく水田を造成するのに大きな労働力が必要となるからです。また、水田経営を進める上では、常に水利をめぐる利害調整をはかる必要があります。こうした灌漑水田の造成と、水田経営をめぐる利害調整は、社会の質的变化をもたらしたことでしょう。

灌漑水田による稲作が始まる前と後では大きな社会変化があったことは間違いありません。弥生時代中期前葉と中期中葉の間は大きな変革期だったのです。集落がまるで「総入れ替え」のような状態になった、ということは消長表（Fig.16）をご覧いただければ一目瞭然です。

この変革期を越えて継続した遺跡がほとんどない中で（弥生時代前期以来の集落がほとんど終焉を迎える中で）、河原田遺跡は変革期を乗り越え、途絶えることなく連綿と存続しえた凄い遺跡なのです。

5. クロスロードとしての河原田遺跡

長期間存続した河原田遺跡では、各時期において、遠隔地から物資や情報を入手していました。ここからは、遠隔地との交流を示す出土遺物を見ていきましょう。

弥生時代前期後葉の出土遺物でまず注目したいのは遠賀川系土器の壺です。遠賀川系土器とは灌漑稲作とともに広がった土器だと、先ほど申し上げました。

そして、もう一つ注目したいのは、金剛坂式（亜流の遠賀川式）の甕です。これも亜流の遠賀川式というくらいですから、外来系の土器です。

このような遠賀川系の土器（水稻耕作を基調として生まれた日常生活道具で、稲作とともに広がった土器）が、河原田遺跡にもたらされています。本格的に稲作を始めた地域では、遠賀川系土器をメインに使うようになる訳ですが、この時期、河原田遺跡ではまだ条痕文系土器をメインに使っていますので、遠賀川系土器はあくまで少数派で、客体的な存在です。それでも、このような外来系の土器が入って来ているということは重要です。遠賀川系土器が河原田遺跡にもたらされたイメージを図化してみました（Fig.17）。

この図のように、遠隔地から一気に土器がもたらされたのかも知れませんが、隣接する集落同士のネットワークを通して、集落から集落へとリレー方式で伝えたのかも知れません。また、土器自体が搬入されたのではなく、土器づくりの情報や影響だけが伝わったのかも知れません。いずれにしても、弥生時代前期後葉には、遠賀川系土器という外来系の土器が河原田遺跡にもたらされているのです。この時期、西から、おそらく伊勢

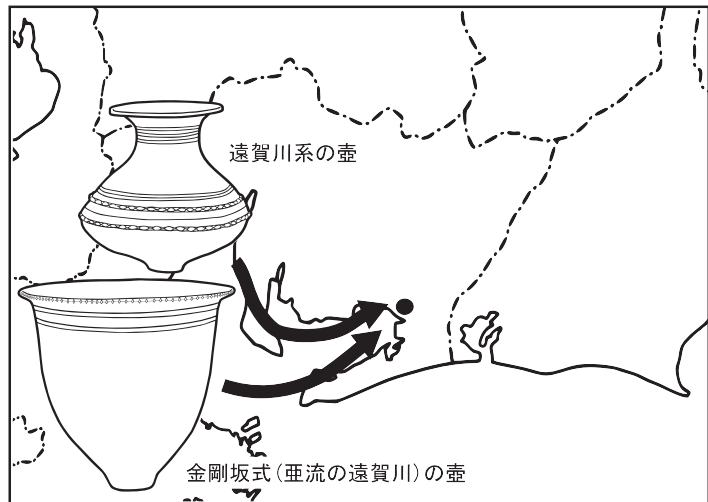


Fig.17 土器にみる交流(弥生時代前期後葉)

勢方面からの情報や影響が河原田遺跡にもたらされていたのは間違いありません。

次は、弥生時代中期前葉における遠隔地との交流を示す出土遺物を見ていきましょう。

まずは、尾張地方の朝日式の壺に見られる貝殻描文の土器です。この土器は小さな破片が出土しただけですが、頸部は筒状で、口頸部と胴部の長さがほぼ等しくなるようなプロポーシオンの壺です。土器の表面を見ると、ギザギザの貝殻でひっかいた直線文が観察できます。ひっかきながら途中で貝殻を止めた痕（二枚貝の弧状の静止痕）も観察できます。これは、尾張地方の朝日式の土器の手法です。ですから、この土器は尾張地方の手法をこの地域で取り入れた土器、すなわち尾張地方のものに似せて作った土器だということになります（あるいは、朝日式に似せて作った土器ではなく、朝日式の壺そのものである可能性もあります。この場合は尾張地方から運ばれてきた搬入品ということになります）。

中期前葉で注目すべき次の土器は、朝日式の大型の鉢です。これは尾張地方から運ばれてきた

搬入品だと思われます。

中期前葉でさらに注目すべき土器があります。厚口鉢です。厚口鉢が確認できたことは私たちにとって驚きでした。厚口鉢は、西からの外来系の土器で、扁平で口縁部が分厚い変わった形をしています。厚口鉢は、弥生時代中期前葉に尾張を中心に分布するものです。西三河や三重県でも出土します。どうやら尾張辺りの土器かと思われるものなのですが、これが、遠く岐阜県や長野県などにも運ばれているのです。有名な奈良県の唐古・鍵遺跡でも出土しています。

それなのに、なぜか、今まで東三河では厚口鉢の出土が確認されませんでした。東三河には存在しない、というのが厚口鉢の分布の特徴でした。それが今回、河原田遺跡で厚口鉢の出土が確認できたことによって（それも6点も確認できました）、東三河にも厚口鉢が分布していたことが明らかとなりました。

言い方を変えれば、河原田遺跡は東三河にありながらも、厚口鉢を出土するような、尾張っばい、西三河っばい遺跡だ、と言うことができるでしょう。弥生時代中期前葉における外来の影響をイメージ化すると次のようになります (Fig.18)。

弥生時代中期前葉の河原田遺跡には、尾張地方の朝日式の壺に見られる貝殻描文の技法がもたらされ（あるいは、朝日式の壺そのものが搬入品として持ち込まれ）、同じく尾張地方の朝日式の大型鉢が搬入品として持ち込まれ、これまた同じく西からの外来系の土器として厚口鉢ももたらされているのです。河原田遺跡には、弥生時代中期前葉にも、これぞ尾張というような、西からの影響や物資がもたらされていたのは間違いありません。

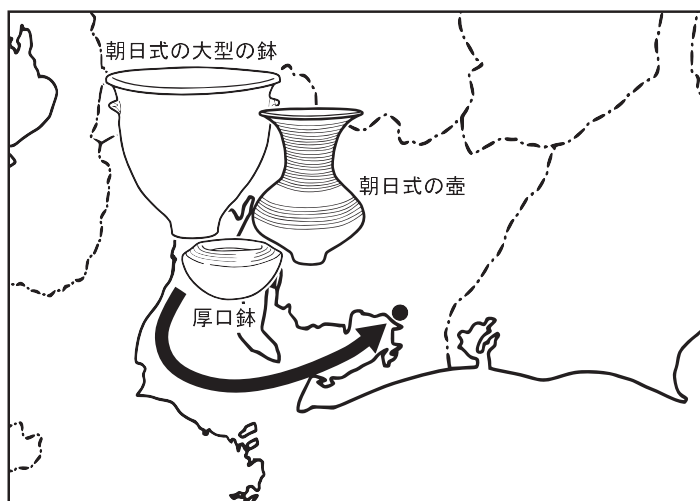


Fig.18 土器にみる交流(弥生時代中期前葉)

次は、弥生時代中期中葉における遠隔地との交流を示す出土遺物を見ていきましょう。

まずは尾張地方の貝田町式の細頸壺です。この細頸壺は、この土器自体が尾張地方からの搬入品だと思われます。

中期中葉で注目すべき次の土器は台盤状土製品です。これも尾張地方の貝田町式の製品です。まるで土の塊みたくに見えますが、煮炊き用の甕の脚、甕の土台の役目を果たした土製品です。この台盤状土製品も尾張地方からの搬入品だと思われます。

中期中葉でさらに注目すべきは、外面を飾る丸い模様（刺突円文）と、太い横線（太い沈線）が特徴的な細頸壺です。遠江の嶺田式土器の特徴とよく似ています。この細頸壺は、小さな破片が出土しただけですから、遠江地方から搬入された嶺田式土器なのかどうか判断できませんけれども（破片だとなかなか素性が掴みにくいのです）、少なくとも遠江の嶺田式土器との親縁性を想起させるものである、ということは指摘できます。

弥生時代中期中葉における河原田遺跡への外来の影響をイメージ図にすると次のようになりま

す (Fig.19)。

弥生時代中期中葉の河原田遺跡には、尾張地方から貝田町式の細頸壺と台盤状土製品が搬入品として持ち込まれており、さらに、遠江の嶺田式土器と親縁性のある細頸壺も存在しました。すなわち、弥生時代中期中葉の河原田遺跡には、西の尾張地方からの文物がどんどん入って来ており、さらに、東の遠江地方とのネットワークもあった、ということになります。この時期、東西からの文物や影響が河原田遺跡にもたらされ、活況を呈していたであろうことは想像に難くありません。

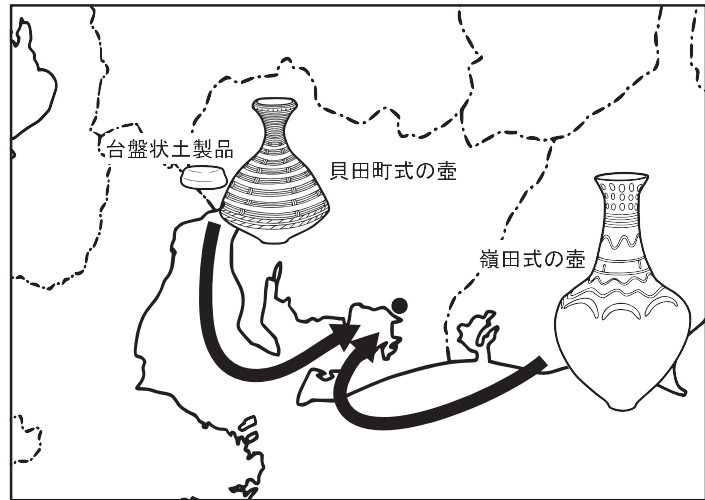


Fig.19 土器にみる交流(弥生時代中期中葉)

6. 弥生文化は海から来た

今ご覧いただきましたように、河原田遺跡には、弥生時代の前期後葉・中期前葉・中期中葉と、継続的に遠隔地からの物資や情報をもたらされていました。このように長期間存続した河原田遺跡ですが、その集落規模は特に拡大することもなく、一定規模でずっと継続したようです。これは興味深いことです。

例えば、中期中葉の頃、東三河で灌漑稲作が始まった時期になっても、河原田遺跡は集落規模を拡大することなく、一定の規模でずっと継続したようです。河原田遺跡ではたくさんの土器棺が出土していますから、小さな集落だった筈はありません。ある程度の大きさの集落だったことは間違いないのです。それにしても、長期間継続した集落であるならば、東三河で灌漑稲作が始まった中期中葉に集落規模が拡大しそうなものですが、そうはならなかったようなのです。集落が大きくなれば、その時期の出土遺物の量も多くなる訳ですが、その様子は見られません。

先ほども申し上げましたように、灌漑水田には大きな労働力が必要です。ですから、灌漑水田を始めれば、当然、集落の規模は大きくなります。言い方を換えれば、集落規模を大きくしないと灌漑水田は行なえない、ということになります。

河原田遺跡においても、中期中葉以降、米づくりは行なわれたでしょうが、集落が拡大した様子がないことから、水田は大規模ではなかったと推測します。つまり、河原田遺跡は大規模な水田を持たなくても営んでいけた集落だった、と考えられるのです。

河原田遺跡は、大きな水田を持つのではなく、遠隔地からの物資や情報の中継基地として、海の玄関口として機能した集落だったのではないかと考えられます。弥生時代前期から後期までずっと存続し、海の近くに位置することから、私はそのように考えます。

東三河を見渡せば、河原田遺跡は海の玄関口的な位置を占めています。また、河原田遺跡のす

ぐ傍を流れる安藤川は、音羽川の旧流路ですから、その流れを遡っていけば、上流のいくつかの弥生遺跡にたどり着きます。河原田遺跡は、海の玄関口、中継基地として機能した、だから大規模な水田を持たなくても営んでいけたのだ、と考えます。

まとめますと、河原田遺跡には、弥生時代前期後葉においては西から（伊勢方面から）の物資や情報をもたらされました。弥生時代中期前葉にも西から（尾張方面から）の物資や情報をもたらされました。弥生時代中期中葉には西から（尾張方面から）物資や情報をもたらされるとともに、東の遠江方面とのネットワークもありました。このような外来物資や外来情報の受け入れ口、中継地点、海の玄関口、それが河原田遺跡だったと考えます。

もちろん、外来系の土器が出土するのは河原田遺跡に限ったことではありません。他の遺跡でも散見されます。それでも、河原田遺跡ほど長く存続した弥生遺跡はほとんどありません。それに、河原田遺跡の土器を見ていると、東三河にありながらも、西からの影響を強く感じます。

私は、河原田遺跡が東三河のすべての弥生遺跡の玄関口だったなんて、大それた事を言うつもりはありません。けれども、河原田遺跡が、東三河における弥生文化の入口の一つ、それも重要な入口だったことは間違いないと思います。河原田遺跡の土器を見ていると、東三河において「弥生文化は海から来た」と言えるのではないか、と思えるのです。これは、東三河の初期弥生文化成立を考えるうえでのキーワードになると考えます。

今日は、資料整理を終えている弥生時代中期までの話を中心に報告させていただきました。弥生時代後期以降についても今後資料整理を進めて、また皆様にお話させていただく機会があれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。